

未黒野 平成二十四年八月五日発行 第六十七巻第九号(通巻七九三号)

未黒野

すぐろの

9月号
(通巻793号)

入院記（二）

小川玉泉

灯を消され色失へる七変化
時の日や子は岩煙草見て来しと
二番花咲き病室の花菖蒲
ひまはりの十輪飾り洗面所

病室に走り蚊羽音なかりけり
雀二羽碍子に遊び梅雨の晴
退院の叶はず父の日なりけり
山腹にのぞく尖塔梅雨の晴
満天の梅雨雲に隙なかりけり
初物の伽羅路香り患者食
階前の青葉ゆらさず濡らす雨
朝焼や腰掛けて拭く寝起き顔

紫陽花

松本三千夫

蜘蛛糸を張る雨粒を結ばんと
蜘蛛の囿の奥の竹林闇ふかく
蜘蛛の子や家へ帰るとチャイム鳴り
蔦八景島 六句茂り間口二軒の喫茶店
蝶止まるごと手を置きぬ濃紫陽花
あぢさゐの白の陰翳日に聡き
鐘打つや紫陽花色をもて応ふ
紫陽花のスタンプラリー坂がかり
紫陽花へ海豚のシヨーの人どつと
潮の香や紫陽花巡り島めぐり
梅雨蝶や墓の三基は隠れ耶蘇
抽んでて穢れに遠し白菖蒲

甲矢集

配列は音順（当月巻頭作家は
次号は末尾になり以下同じ）

明易し

黒滝志麻子

夏草や四五戸へ曲る村の道
湖の翡翠の色に明易し
草踏めば足音消ゆるかたつむり
庇にもとどく寂光朴ひらく
再会はひととせぶりや遠河鹿
薫風や街道筋の藍暖簾
龍太先生語る女将や河鹿笛
ゆるやかにつづく稜線夕焼けて
翳やかなる草に止まりぬ糸蜻蛉
夏燕灯台へ波立ち上がり

慈悲心鳥

田中臥石



卯波寄す銚子岬のホテル跡
本誌一泊吟行地
泡沫の夢の旅館や卯波荒る
ふたたびの左千夫生家や青楓
葦切や捕虫草観る渡り板
補植苗手に田廻りの娘婿
蛤を拾へり妻の声若し
足で搔く蛤大き潮衣
梅雨空の暗きみちのく郡山
主宰病むや慈悲心鳥の案じ鳴き
磐梯の湯やそびらより青葉木菟

乙矢集

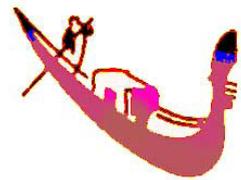
配列は音順（当月巻頭作家は
次号は末尾になり以下同じ）
太字は推薦句

夕 虹 安齋久英

薔薇苑の隠れ咲きたる一重かな
餌を狙ふ鳶の矢の如麦の秋
滴りや素掘りトンネル足早に
夕虹の片脚架かる入江かな
鳥声に和すや早瀬の夕河鹿
身の丈の草分け汲むや岩清水
ががんぼや夜の玻璃戸を打ち続け

白牡丹 石黒興平

波に腰打たせ鋤簾の浅蜷取
いち早く根付き風呼ぶ余り苗
板敷の踏めば鳴る廊たかしの忌
姫垣の固き棕櫚繩白牡丹
払暁の靄の流れやほととぎす
ぼうたんの脇に磨ぎ水宮大工
茶房にてすます昼食桜桃忌



新樹光 岡田史女

浅草や神輿の足の勢ひ立つ
蟻走るスカイツリーの足元に
小満の金環食を仰ぐかな
坐りごこち良き石一つ新樹光
黒南風や深閑として杉木立
みんなみへ雲の流るる花菖蒲
さざなみや植田の水め深きより

新樹光 岡野里子

えご散るや魚影さ走る細小川
新樹光バケツに稚魚の五六匹
せせらぎや茉莉花の香を身に纏ひ
鐘楼の柱朱塗や楠若葉
秀の高き噴水富士の伏流と
山窪に群れてひそやか京鹿の子
束ね切る露の香剥ける筋の嵩

ポピー散る 小倉正穂

蝮蛇草辺りの風を冥くせる
山門の古色に映えて若楓
新緑に濾されきし風深く吸ふ
玩具めく一輛電車麦は黄に
ポピー散る吐息がほどの風に散る
友二碑へ夕ほととぎす声残し
夏つばきけさ咲き初むと妣に告ぐ

日雷 加藤静江

深ぶかと山ふくらみぬ若葉雨
水源の森の昏さや日雷
老鶯や登りの多き児童園
蘆若葉釣果は雑魚の二匹のみ
木洩日の揺るるに紛れ黒揚羽
健脚に戻りし夢や明易き
竹林の風の乾きや蛇の衣

青炎集

横浜 熊切 修

日表に泳ぎ出でたり牛蛙
逆光の椎の大樹や風五月
葉桜や否応なしに年重ね
ありなしの風のほてるや花石榴
誰を待つやら隠沼の通し鴨
立ち上る仔牛の一步青葉光

横浜 鍋島 武彦

筑波嶺や地平の限り麦の秋
海に来て地震の話や松葉散る
夏草や野島に今も塚の跡
野仏を巡る山里桐の花
石楠花や五丈に余る磨崖仏
書に倦みし窓に卯の花腐しかな

小川玉泉選

横浜 小田嶋正敏

早乙女の出番のさんさ踊りかな
アカシヤの花散る壁の落書かな
十葉の庭といふべき午後となる
南天の花豊かなり静かなり
通るたび折られてをりぬ額の花
蛭見の闇待つ夕の小料理屋

横浜 山崎 稔子

ほととぎす沖の灯の消えやらず
一湾を望む庭園花海桐
一斉に沖向くヨット羊雲
新緑を抜け白き富士真向ひに
鳴焼に箸のすすめる夕餉かな
風涼しアイロンかけの手元まで



千葉 内山タエ

飴色に落煮て母を恋ひにけり
みどり児の大きな欠伸緑さす

躍動の赤子の手足五月来ぬ

命名の「ひな」としたため風薫る

祝ぎ事に舞の所望や夏つばめ

風を呼ぶロープウエーや五月富士

横浜 波多野孝枝

白日傘脇に薬師を拝みけり

通学路の胸突き坂や薄暑光

掃き寄せて匂ひ立ちたる樟落葉

目の疲れ癒し盛りの庭杜鵑花

円墳の木洩れ日揺らし若葉風

十葉の花に埋まり社員寮

横浜 太田良一

姥捨の民話の宿や夏火鉢

弔問や言葉むなしき夏座敷

不器用に生きて定年蛍の夜

紫陽花や波の音聞く能登の宿

毒婦てふお伝の墓や男梅雨

はや神の争ふ初夏のいなびかり

横浜 高橋 明

一夜さの雨の霽れたり柿若葉

夕風に崩るるばかり白牡丹

新緑の木漏れ日蒼し石畳

残照の薄るる空や桐の花

鮮やかさ紫を抜く白菖蒲

光みつる金色堂や夏木立

宮城 男澤榮男

みちのくは少し早めや梅雨の入り

久方に夏経の墨の匂ひかな

夏つばめ落ちこぼれなく目くばりし

子の遊ぶ机の上のかたつわり

みどり女の句碑に拾ひぬ落し文

父の日や独り暮しは静かすぎ

横浜 土田 亮

若葉垣抜けし江ノ電海展く

夏燕つと擦り抜くる切通し

電弾く軒に忘れし小鳥籠

かたくなを通す木綿の冷奴

菩提寺の杜鵑花に埋もれ羅漢どち

法華経を唱ふ法会や朴の花

耕 土 集

松本三千夫選



神苑の池の水泡や青時雨
夕薄暑男料理の腕まくり

横浜 高木 邦雄

バルト海空高々と雲の峰
フィヨルドの滝千仞をなだれ落ち
篁の幽けき音や梅雨止まず

藁屋根を萌葱に染むる茂りかな
水打ちて大工ひと日を仕舞ひけり
日の黒子見えぬ曇りや時鳥
万緑や走り根伝ふ隠れ道
桶に移す実梅の音の重きかな

新井八重子

二の矢継ぐ間合の静寂夏燕
衣脱ぎて天さし伸びぬ今年竹
延々と二日に亘り蟻の列
田植女の始終を見たり田一枚
遠洋へ登檣礼や南吹く

伊藤 平八

小さき手に受くるボールや夏の雲
ほほ撫つる小高き丘の風五月
白雲の映ゆる一川夏燕
朝市のはじまる舗道風青し
軒低く夕日まみれや燕の子

椎名文子

磯浜へ海桐の香り放つ道
八つ橋を渡り返して花菖蒲
黒南風の空荘洋と冲暗し
釣忍育て余生の深庇
足弱の吾を斑猫の待ち呉れし

澤田 澄子

網の目を通り抜けたる薄暑かな
伸び伸びと門を覆ひて松落葉
白百合やワイン似合はぬ同期会
枇杷の実の葉影はみ出す数となる
区の花の知る人ぞ知る紫蘭かな

新倉ゆき江